



# 展示写真解説集

期間：平成 26 年 6 月 6 日（金）～7 月 6 日（日）

会場：鹿児島県立博物館本館 1 階企画展示室

## 奄美を育む水



南の島といえば「青い空と海，白い砂浜とサンゴ礁」というイメージをお持ちの方も多いでしょう。しかし，奄美大島の自然・生き物を支えているのは，山に降る雨と地面にしみこむ水，それが集まる沢などが保っている「湿度」です。湿度がある地域だからこそ，ここでしか見られない固有の生き物たちが，世界でも類を見ない多様な生き物たちと共に生息しているのです。



黒潮からの水蒸気が山肌に露となって落ち，それが集まり沢となります。奄美の生き物たちは恵まれた湿度のもとで，長い年月をかけて進化を遂げてきました。



高い湿度のおかげで，地面だけでなく樹木の幹や枝でも植物が生えることができます。このような着生植物が多いのも奄美大島の特徴です。同じ緯度で地球を一周してみると，ヒマラヤの高地や砂漠など，生き物に厳しい地域が多いことがわかります。奄美のように多様な生き物がすむ地域は，ほかに見あたりません。

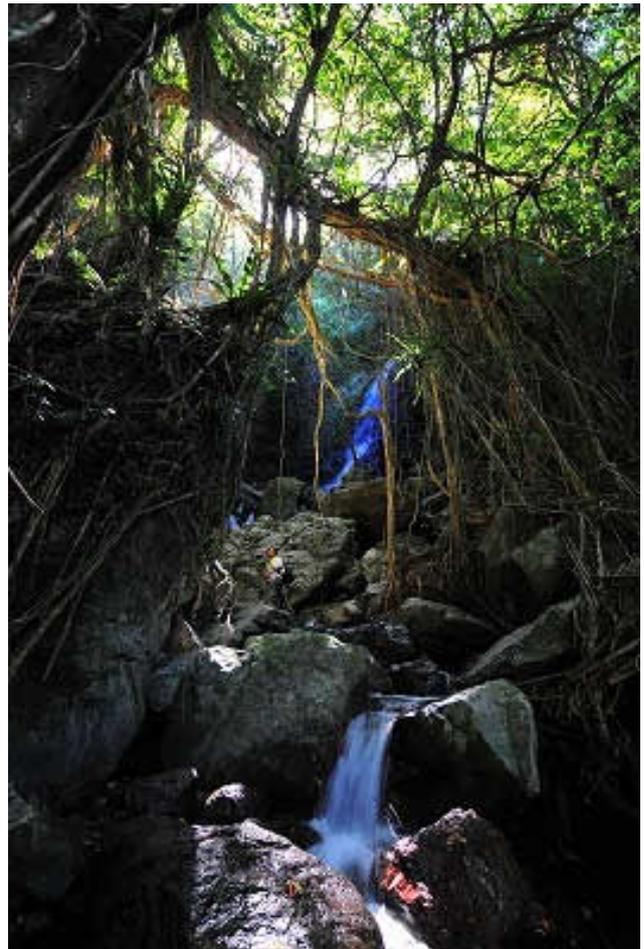


タンギョの滝



す。滝の左右に根を下ろしています。中央に人が小さく写っているの、その大きさが分かるでしょう。

奄美大島の山の中を歩けば、数多くの沢と滝に出会うことができます。これらは真夏でも枯れることはありません。つまり、奄美大島の山々は、それらを支えるだけの水を常に蓄えているのです。この湿潤さが、多くの生き物たちを支えています。



滝を渡るガジュマル

奄美大島には数多くの滝があります。集落から見えるもの、林道沿いに見られるもの、山の中を長い間歩いてようやく見られるものなど、滝によってその素顔も異なります。

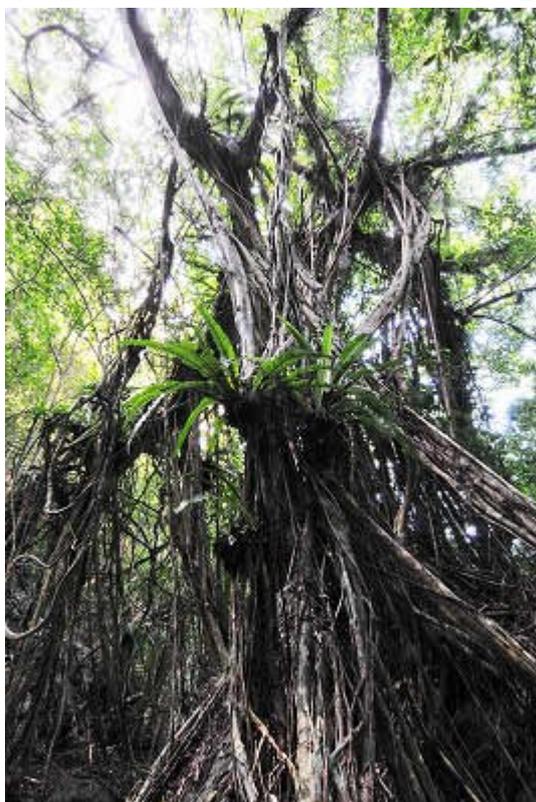
「タンギョの滝」は、奄美大島で最も落差の大きな滝です。奄美市住用の山中深くにあり、見たことのない方も多いでしょう。

「滝を渡るガジュマル」は、奄美大島でも最も根の発達したガジュマルの一つで

## 奄美の森の巨人



春、奄美大島は新緑の季節を迎えます。「ブロッコリーのような」と表現されることも多い、起伏に富んだ山肌の黄緑色は、奄美の森に新しい季節の訪れを教えてください。



この森にも大木が存在します。屋久島の縄文杉のような古いものはありませんが、オキナワウラジログシなどのように板根を形成するものもあります。今回紹介するガジュマルやアコウは、クワ科の植物です。両種とも、幹や枝から「気根」と呼ばれるひげのようなものを出します。気根は地面に達すると急に太くなり始め、木を支えることができるほどに成長します。鳥などによって種子が運ばれ、他の木の枝上などで発芽したガジュマルなどは、気根を下にのぼして成長し、最終的には元の木を覆い尽くしてしまう場合があります。そうすると巻きつかれた木は成長が悪くなり、枯らすこともあります。そのため、このようなクワ科植物を「絞め殺し植物」という、ちょっと怖い名前でも呼ぶ場合もあります。

## 奄美の貴重な植物



アマミスミレ（左）は奄美大島固有の植物で、ある地域に限られた数しか見られない環境省 IB 類指定の絶滅危惧種です。

奄美大島と徳之島に見られるアマミテンナンショウ（右）は、サトイモ科の植物です。湯湾岳周辺では急速に個体数が減少していて、非常に心配です。



ユワンツチトリモチ（左）は奄美大島に固有と思われる。現在 2カ所しか生育地が見つかっていない、貴重な植物です。フジノカンアオイ（右）は奄美大島固有で、島の西部から中央部にしか生えていません。冬から春にかけて、地面に這うような花を咲かせます。



アマミカタバミは限られた地域に数カ所しか生息場所が知られていない絶滅危惧種で、環境省のレッドリストでも絶滅危惧 IB 類に指定されています。溪流に生える、非常に小さな植物です。



イジュ（左）はヒメツバキとも呼ばれるツバキ科の植物で、奄美大島よりも南に分布します。アマミセイシカ（中・右）は奄美大島固有のツツジの仲間です。山に自生しているものが採集されてしまい、だいぶ少なくなりました。



ワダツミノキ（左）は2004年に新種とされた、クサミズキに近縁の植物です。奄美大島のごく限られた地域に生えています。アマミアセビ（右）はツツジ科の植物です。2010年にアセビから独立した種とされました。



屋久島を北限としているマメ科植物のモダマは、奄美大島で自生しているのは奄美市住用に1カ所だけで、市の天然記念物となっています。さや（左）は大きなものでは1mを超え、花は3月～8月に咲きます。



ヒメシラヒゲラン（左）は奄美大島の固有種で、ごく一部の地域でのみ確認されます。サガリラン（右上）、ケイタオフウラン（右下）は、共に中国大陸・台湾には分布するものの、沖縄本島には分布せず、奄美大島に隔離分布しています。サガリランの野生株はほぼ絶滅したのではないかとはいえないほど少なくなっています。



リュウキュウサギソウ（左）は、宝島以南の琉球列島から台湾・中国大陸にかけて分布の記録があります。奄美大島に2地点、沖永良部島から1地点確認されていますが、詳細は不明です。

ツルラン（中）は南西諸島に広く分布し、山地に普通に生えている大型のランです。夏の奄美大島の山で、純白な美しい花を咲かせている植物です。

ウケユリ（右）は奄美大島の湯湾岳周辺と請島にのみ分布しているとされていましたが、最近徳之島でも見つかりました。ヒトによる採取に加え、ヤギによる食害も重なり非常に少なくなっています。

## 奄美に固有な動物



ハブ（左）は奄美大島・加計呂麻島，請島，与路島，徳之島および沖縄諸島にすんでいます。猛毒を持ち，地元の人にはハブにかまれることを「うたれる」といいます。写真のハブは，撮影中に何度もレンズに向かって飛びかかってきました。アマミアオガエル（右）は水辺に産卵します。卵はメレンゲ状の泡に包まれており，ふ化するとここから出て水の中にオタマジャクシが落ちていきます。



オットンガエルのオスは自らの身体を使って円形の窪地をつくり，その中で鳴くことでメスをよびます（左上）。そこにメスがやってくるとしっかりと抱きかかえ（右上），産卵・放精します。この卵を多くの生き物が狙っており，たとえばモクズガニなどは窪地に侵入して，卵を食べてしまいます（左下）。その様子を撮影していましたが，あまりにもモクズガニが豪快に食べるので「もうそれぐらいにしてあげて」とカニを遠ざけたほどでした。



アマミイシカワガエルは沖縄本島にすむものと色彩や斑紋の大きさに違いがあり、2010年に別種と分けられた、奄美大島固有のカエルです。冬から早春にかけて、沢沿いの声のよく通るところで、オスはメスを呼びます（左上）。メスが鳴き声に惹かれてやってくると（右上）、オスはメスを抱えて産卵・放精に至ります（左下）。奄美大島ではオットンガエルに次ぐ大きさのオタマジヤクシで、成長すると陸に上がります（右下）。

イボイモリは奄美大島、請島、徳之島及び沖縄諸島に分布しています。

イボイモリは極めて古い時代の特徴を持ち続けており、おそらく奄美諸島や沖縄諸島が大陸と陸橋としてつながった時期に起源を持つと考えられています。奄美大島ではあまり多くなく、徳之島では高密度に生息していた地域がありましたが、近年の開発で危険な状況にあります。湿潤な林と安定した水域が必要であり、開発などにより絶滅の危機に瀕しています。





アマミノクロウサギは奄美大島と徳之島に生息する固有のほ乳類です。大きさ約 50cm 程度、重さ 1.3kg~2.7kg 程度です。原生的な森の中で、巣穴を掘ったり岩の裂け目（右下）などを利用して休息しています。エサを食べるのはやや開けた二次林的なところを好み、両者が混在している場所を生息地として好みます。林道や河原など開けたところで採餌し、糞をまとめてします（左下）。



ケナガネズミは奄美大島や徳之島、沖縄島北部（やんばる）にすみ、頭と胴で 30cm 程度、尾の長さが 30cm 程度と、日本で一番大きなネズミです。夜間枝から枝へと渡り歩きながらアカメガシワ、ウラジロエノキ、ハゼノキ、スダジイなどの実や葉を食べます。尾の半分から 3 分の 1 が白いのが特徴です。



アマミトゲネズミはトクノシマトゲネズミ、オキナワトゲネズミと染色体数などが大きく異なり、2006年にそれぞれ別種に分けられました。非常に生息密度が低く絶滅が危惧されています。近年奄美大島ではフイリマングースの駆除が進み、本種が生息しやすい環境が取り戻されつつあります。しかし、開発により生息地が根こそぎ無くなってしまふこともありますので、十分に注意が必要です。



オーストンオオアカゲラ（左）は、キツツキの仲間：オオアカゲラの一亜種で、奄美大島だけに生息しています。他の亜種に比べて身体が大きく、また羽色が著しく暗色ではっきりと区別できます。広葉樹の大木などに巣を作り、朽木の中のカミキリムシの幼虫などを採餌します。

近年、林道建設や伐採などによって森が分断され、林縁近くで営巣が行われるようになりましたが、リュウキュウハシブトガラスによる襲撃もあり問題化しています。



ルリカケスは、奄美大島・加計呂麻島・請島にのみ生息し、「県の鳥」に指定されています。近年その個体数が増えてきたことから、2008年に国内希少野生動植物一覧から外されました。国指定の天然記念物でもあり、地元奄美大島では環境省から委託を受けた奄美野鳥の会が主体となり、営巣のモニタリング調査などを行っています。



オオトラツグミは本州・四国・九州にすむトラツグミの亜種で、奄美大島にしかない固有の亜種です。トラツグミは渡りを行い、冬には奄美大島でも見られますが、オオトラツグミは渡りをしません。鳴き声は全く違うので、ちょっと気をつければ誰でもわかるようになります。奄美野鳥の会による3月のモニタリング調査は20年を超え、全国でも稀な調査となっています。年によって鳴き声の聞かれる数は増減しますが、ここ数年はかなり多く記録されるようになりました。



アマミヤマシギは奄美諸島にのみすむ固有種です。繁殖は奄美大島，加計呂麻島，請島，与路島，徳之島で確認されていますが，冬季には喜界島や沖永良部島でも目撃されています。地面を歩きながらミミズなど土壤生物を食べています。子どもを連れているメスは，驚くと羽の下にヒナを隠す行動を見せてくれます。

## 奄美の豊かな自然



マングローブ林とその先にある干潟は，生物の多様性を保つためにも非常に重要な場所です。注意しなければならないのは，それぞれの環境に適したそれぞれの生き物が生活していることです。環境教育の一環として「メヒルギの植栽をしましょう」と，干潟にメヒルギの幼木を植える授業が行われますが，これは干潟の生き物の生活の場を奪うことでもあり，非常に危険です。



ルリマダラシオマネキ



ヤエヤマシオマネキ



オキナワハクセンシオマネキ

琉球列島にはヤエヤマシオマネキ，リュウキュウシオマネキ，ヒメシオマネキ，ルリマダラシオマネキ，オキナワハクセンシオマネキ，ベニシオマネキ，シモフリシオマネキ，シオマネキの合計8種が生息します。そのうち奄美大島にはシオマネキを除く7種<sup>(注)</sup>が生息しています。これらの種は河川ごと，あるいは砂や泥などの違いにより，見られる種が異なります。つまり，奄美大島に様々な環境があることが，多様なシオマネキたちの生活を支えています。

(注) 参考文献では奄美大島には6種のシオマネキが記載されているが，その後1種新たに見つかった。



アカテノコギリガザミ



クロツラヘラサギ

マングローブには落ち葉や山からの有機物などが流れ込み，それを分解する菌類や貝類，それを食べるカニや魚など多くの生き物が暮らしています。シギやチドリ，サギなどの鳥たちも集まります。

足を踏み入ると身動きが取れなくなるほど泥が沈み込み，鼻をつく硫黄臭のする地域ですが，それらの環境を利用して，さまざまな生き物が生活している姿を見れば，「いろいろな生き物が関係し合って生きている＝生物多様性」を感じることができるでしょう。



リュウキュウアユは、種子島以北のアユと比べて小柄になり、特徴的な形態を持つ亜種です。沖縄島の河川やダム湖にすむ個体群は、一度絶滅したために奄美大島のものを移殖したものです。現存する野生の個体群は住用川や役勝川など、奄美大島の限られた河川でしか見られません。



アカヒゲは男女群島と屋久島以南の琉球列島にのみ見られる日本固有種です。奄美大島やトカラ列島などに見られる亜種（アカヒゲ）は、夏鳥として飛来します。沖縄本島、石垣島などは亜種（ホントウアカヒゲ）が留鳥として生息しています。

種の保存法に基づく国内希少野生動植物種、および国の天然記念物に指定されています。野生のものを捕まえて飼育することは禁じられていますので、ご注意ください。



ベニアジサシは夏鳥として飛来します。近年福岡県でも繁殖が確認されました。鹿児島県では馬毛島、種子島、奄美大島、徳之島で繁殖が確認されています。

繁殖地である岩礁地帯の開発や、ヒトの進入によりヒナを放棄するなどの問題が生じており、今後ヒトの活動との折り合いが非常に重要になる種の一つです。



リュウキュウコノハズクはトカラ列島・中之島を繁殖の北限とする留鳥です。山地のみならず人里にも姿を見せます。夜の林道でアマミサソリモドキやナナフシなどの昆虫類を主に捕まえて食べます。



リュウキュウアカショウビンは夏鳥として奄美大島などに飛来します。カエルやトカゲ，様々な昆虫類をエサとして捕まえます。「クッカル～」という独特の鳴き声は，奄美の森に心地よく響く音です。



リュウキュウイノシシは奄美諸島・沖縄島，石垣島，西表島に分布しています。大陸に広く分布しているユーラシアイノシシの一亜種です。

体重 20kg～70kg と，本州・四国・九州にすむ別亜種ニホンイノシシに比べて小型になります。

#### 参考文献

- ・ 鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物（動物編）（2003年，鹿児島県）
- ・ 琉球列島の陸水生物（2003年，西島信昇監修：東海大学出版会）
- ・ 奄美群島植物目録（2013年，堀田満：鹿児島大学総合研究博物館研究報告，6）

## 世界自然遺産候補地としての奄美・琉球

奄美・琉球は、

- ・複雑な歴史を持つ「固有種」が多い
- ・絶滅危惧種が多く、世界的に見ても生物多様性保全上重要

という理由から、世界自然遺産の候補になりました。

奄美大島、徳之島、沖縄本島北部（やんばる）、西表島の中の、亜熱帯林がその対象とされ、その登録に向けた準備が進められています。

### キーワード

- ・ここにしかない生き物が多い
- ・いろいろな生き物が、つながりあって生活している

